続 徒然 つれづれ

小部屋の中から

桑野　巍

口の悪い男がいた。日本政治の怠慢ぶりをしかと見て「自眠党、眠主党、社眠党と漢字を変換した方がいい時代に入った」と笑いながら批判した。「わあわあ議論しようよ」という“緊急雑談会”の幹事も呆気（あっけ）に取られた。団塊の世代よりも少し古手の数人（女性一人を含む）が集まった。会の名前はないが「自遊人会」とでも名付けようか。出席者の半数はテレビの政治関連バラエティ番組をよく見るというが、残り半数はバカバカしいから絶対見ない派だ。幹事は「発言は自由、無責任でよい。手前味噌も批判も多ければ多いほど面白い。初老有権者たちの井戸端会議にしたい」と提案した。

会場は半分現役の幹事の会社の会議室。時は春の午後。時間制限はあって無きが如き。いうならばみんな元気な年金生活者なのだ。口火を切ったのは元銀行マン。――僕は先日、古い読み物に出合った。昭和初期の不況時に「寝ていても食える方法を教える。50銭送れ」というもので、当時の東京市の得体の知れない団体が新聞に広告を出した。これに応募した人がいて50銭を送った。返事は紙切れ一枚で「熊の穴の前に寝ていろ。確実に寝ていても食われる」と書いてあったという。

お金を送った人は地団太を踏んで悔やしがったそうだ。50銭といえども大事なお金で、送り主は「ふざけるな」と怒ったそうだが、50銭で一生涯寝て食おうという人もあつかましいし、怠け者を釣って金儲けする方も図々しい。いつの世もうまい話はないものですと真面目顔だったが一同は大笑いした。彼は世話好きで勉強家、謙虚な人柄だがまず最近の世相に触れ、話題を政治に移した。

「今の政治家、政党はタコあげみたいだ。どちらも風（世論）頼みで、ピリッとした哲学を持ち合わせていない。政治がしっかりしないから日本は地球社会から取り残される」と自論を主張、そのあと化学メーカーに勤務していた同輩に発言を促した。彼は若いころ営業畑を経験、全国を歩いた。政治家は自らの改革に取り組んでほしいが「それは無理」が結論だという。

政治家は自然や有権者を粗末にしてきたし庶民感覚は全くないに等しい。国会議員も地方議員も二世三世が多過ぎる。そもそも衆院も参院も議員定数は現定数の半分で十分、有権者の声を聞いて、次回の選挙から実施すべきだと思う。「僕は改革は無理といったが、本当は無理ではない。現議員にやる気がないだけで、実に情ない」と興奮気味だった。

高校生のころから政治に興味を持ち、かなり厳しい目で見てきた石油関連業に勤務していた自称政治通の男は「日本の政治は成熟していない」と前置きして、第一は政治家に高い志や国、国民を思う心が欠落している。第二は女性議員が少ない。第三は議員に当選したらその翌日から次回当選のために90％以上のエネルギーを費やす。第四は何事につき高級官僚に頼りすぎだという。油を売ってきた経験からか口も滑らかだった。ところが彼は奥方同伴で隣りを意識し、「隣りの女房にズボンの裾（すそ）を引っ張られた」といって発言を急にストップした。

ここで熱いコーヒーが運ばれてきた。次は元運輸業者だった男の出番だ。「政治も経済も一寸先は暗闇、何が起こっても不思議ではない時代の連続だが、メディアの報道姿勢には満足しない」といって私の方を見た。「知る権利」を主張するのはよいとしても、政治、教育などの問題で国民に不信を植え付けているのではないか。民放テレビは視聴率だけを意識しているからジャーナリズムではなくマンネリズムだ。衣食足りて礼節は乱れっ放しで、各種選挙の投票率が低空飛行を続けているのも現代のマスメディアのせいではないかというのだ。だからメディアが政治を“悪者扱い”にする資格があるかどうか問いたいと手厳しい。

過激発言で小部屋の中は白けたが「みんな一言二言発言したい年ごろ」と思って聞いた。誰もが何でも発言できる時代だけれども、誰もが満足しないし、目の前のことさえ出来ない時代なのかと自分なりに割り切った。高度な消費社会は成熟社会に達しているが政治界はまだ未成熟社会なのか、と小部屋の中で考えさせられた。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）